朝日歌壇 俳壇

高野公彦選

ジタンとかタイパと言ってせわしなく時間に追われる令和の日々かな（横浜市）西前　敦子

赤紙を配りてるしといふ祖父の言葉を想ひ出す開戦忌　（村上市）鈴木　正芳

美しきウサギ群れ居る島で観た毒ガスの痕を胸に刻みぬ　（広島市）武石　亮二

☆鎌倉の大仏さまの背中には翼の位置に窓ふたつあり　（奈良市）山添　聖子

宰相にしたい人だった客死して五年を経たる中村哲氏　（亀岡市）俣野　右内

駅前の書店主は新聞の書評、広告みな頭の中　（相模原市）石井　裕乃

人生の締め括りとなる火葬さえ順番待ちの団塊世代　（札幌市）田巻　成男

大半は他人のために作るもの夫の干し柿われの干し芋　（安中市）岡本千恵子

ヒトの乳房ふたつあるのは救いなりき双子が一緒に乳欲せし時　（千曲市）中村　美樹

スーパーで売ってた大きなホッキ貝ステゴサウルスのとげとげみたい（奈良市）山添　聡介

【評】1首目、便利さを追求すると、かえって生活が気忙しくなる。2首目、当時の祖父の複雑な胸中を思い浮かべる作者。3首目、広島県竹原市の沖にある大久野島はウサギの棲む平和な島だが、戦時中に毒ガス兵器を製造した痕跡が残っている。

永田和宏選

作詞者の名前知らずもこの歌は空で歌える鉄腕アトム　（北海道）狩野　勝弘

肖って子に名いただきし人逝きぬ彼は詩を書き吾は歌を詠む　（五所川原市）戸沢大二郎

長兄と次兄のごとき西田氏と正平さんの逝きて冬来る　（栃木県）川崎　利夫

この世をばもっと気楽に生きろよとペダルを漕いで逝きし正平　（栃木県）手塚　清

桜鍋牡丹鮟鱇てっちりに酒は熱燗小半徳利　（横浜市）徳元てつお

トランプとの五分の電話会談をどちらが先に切ったのだろう　（観音寺市）篠原　俊則

ミュージアムショップで選ぶ碧瑠璃魚形は一番碧いあお　（奈良市）山添　葵

☆鎌倉の大仏さまの背中には翼の位置に窓ふたつあり　（奈良市）山添　聖子

泣くことが分かっているから現像に出せない亡母の最後のフィルム（さいたま市）齋藤　紀子

年毎に小言増してく妻がいて今朝は雨だと我を責めたり　（新潟市）小幡　章

【評】谷川俊太郎、火野正平を悼む歌からそれぞれ二首ずつ。三首目、西田は西田敏行、言われてみれば成程。徳元さんの「小半」は「こなから」と読み、半分の半分で二合半の徳利。目の前で選歌をしている高野公彦に教わった。豪華だなあ。

馬場あき子選

五羽のカモ池の光を横切って遠きサックス秋を広げる　（東京都）椿　泰文

プリーモ・レーヴィの自死の意味を考える戦争の根を断てる気がする（八尾市）宮川　一樹

狐の巣つひに見つけたり裏山の防空壕の跡ふかき穴　（伊那市）小林　勝幸

托鉢の若きラマ僧鉄鉢にシルクロードの干葡萄受く　（三蒲市）秦　孝浩

係留のタグボート並ぶその前を跳ねては秋陽と同化する鯔　（光市）永井すず恵

引退しマワシに代へてネクタイを締めし力士の顔安らけし　（加東市）藤原　明

アカゲラが李の幹を啄いては冬の到来告げる一声　（五所川原市）戸沢大二郎

旧知なる友人のごとく白鷺は釣り人の脇に静かに佇む　（船橋市）梅本　咲子

リスボンの酒場の隅でファドを聴く津軽民謡何処か似ていて　（十和田市）佐藤まさあき

冬の鳥美味しい順に実を食べるウメモドキが先ピラカンサは後　（盛岡市）渡辺　恭

【評】第一首の五羽のカモは母に率いられた子鴨か。サックスの音は河原での練習の音色。いかにも秋だ。第二首のレーヴィはユダヤ系イタリア人の化学者でアウシュビッツからの生還者。事故か自殺か、その死の根底にはなお戦争の影があると。

佐佐木幸綱選

洗濯物たためばなべてわれのもの夫なきことをしみじみ思う　（さいたま市）田上　洋子

県警の「クマップ」に熊の目撃の報あり昨日の散歩の野路と　（光市）永井すず恵

ばあちゃんの昼めし屋つひになくなりて島の幾にん弁当になる　（江田島市）和田　紀元

飼育員の髪まさぐりて蚤さがすチンパンジーの小春日の午後　（横浜市）天野　直子

八百屋にて柿と蜜柑を買ふやうに柿と蜜柑の絵を買ふ婦人　（京都市）五十嵐幸助

玄関を開け入り冷蔵庫まで開くる猿も在るらし回覧板回る　（舞鶴市）吉富　憲治

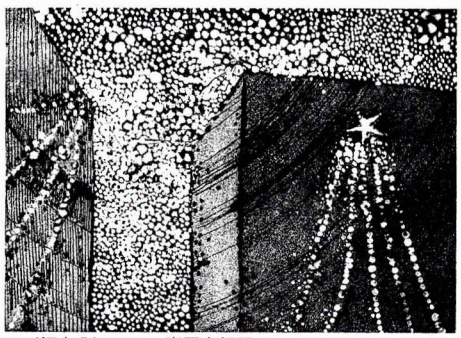
☆鎌倉の大仏さまの背中には翼の位置に窓ふたつあり　（奈良市）山添　聖子

玄関にノマドバッグが置きありて吾子はゆくらし川の調査に　（岐阜市）後藤　進

プレゼント交換会に持ってゆく谷川俊太郎さんの本　（相馬市）根岸　浩一

いつまでも旅は続くと思ってた火野正平が夢の中行く　（茨木市）瀬川　幸子

【評】第一首、一人洗濯物をたたみつつ、二人だった時が思われるのだ。第二首、山口県警はクママップを公開しているらしい。第九、十首。十一月十三日に谷川俊太郎氏、十四日に火野正平氏が他界、両氏への追悼作が多くあった。



〈師走Ⅰ〉　岩尾恵都子

うたをよむ　家族という主題

土井礼一郎

なんの花か知らずにあなたが買ってきた火花をときどき散らすその花

当たり前のようにほかの誰とも違うあなただけのそのあたらしい声

堀静香『みじかい曲』が描くのは、一人の女性の結婚から出産までの物語。しかし、他人にも了解されやすいライフステージの変遷とは別に、ずっとかわらず低回し続ける自我がある。その自我の居心地の悪さこそが本当のテーマであろう。

引用は歌集の序盤と終盤から。一首目の「あなた」は夫で、「火花をときどき散らすその花」とは、結婚という社会制度に本心ではすんなり従うことのできない主人公の気持ちを暗示しているのではないか。片や二首目の「あなた」は生まれてきた子供だが、出産の喜びを直截には描かず、その生の出発から子供を一個の独立した自我として認めようとする。

今日夜道あかるく見えて妹と背中合わせでいると思った

うたたねのあとの砂漠に浮かんでる一昨日の妹のこんばんは

だいぶ雰囲気を異にするものの、今年刊行の歌集のうち家族という主題でもうひとつ度肝を抜かれたのは椛沢知世の『あおむけの踊り場であおむけ』。この歌集には主人公以外、妹しか登場人物が出てこない。

帰宅中、なぜか背中で妹の存在を感じる。寝起きのぼんやりした頭には一昨日の妹の挨拶が浮かぶ。はたしてその「妹」は実在するのか。〈いない妹〉だとしても、彼女を愛することの静かな充足感だけはたしかにここに描き留められている。（歌人）

風信

三村純也句集「高天」　「山茶花」主宰の第6句集。「今日来よと今来よといふ牡丹かな」「鰭酒に思はせぶりなことを言ふ」「汀子恋ふ心に年を惜しみけり」（朔出版・2970円）

坂本宮尾著「竹下しづの女の百句」　明治生まれの女性俳人の作品を鑑賞。「短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎」「ペンが生む字句が悲しと蛾が挑む」（ふらんす堂・1650円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき